

随想

肥後椿

話のくず籠

平塚 泰蔵

イギリスのロイヤル、アカデミー出版の二十世紀版「世界人名辞典」に平塚氏のことが出ていたので読んでみます。と熊日論説委員の岩下さんが読上げた。

「タイゾウ、ヒラツカ」日本人、一九〇一年生れ、一九九九年没、世界肥後椿協会会長、日本のヒゴというヘキ地に生れ、ヘキ地の電力会社の副社長や、お城という大きな名前をもった小さなホテルの経営などをやっていたが、晩年は日本の名花肥後椿の世界的な紹介者として知られ彼の「肥後椿」という著書が出て、肥後椿は一躍今日のような世界的流行をきたした。

現在生きている者を「没」とは少しひどすぎると思ったが九十八まで生きさせてもらった上、世界人名辞典にまで載せろはないくらいである。

壺、瓶などを買い集め骨董品屋、または古道具屋あさりをはじめたのである。いまでは熊本の古道具屋は知らないところはないくらいである。

壺、瓶、いろいろな民芸品が約二百点ぐらいいは収集出来たのであるが、これもまことに馬鹿馬鹿しい様にも思える、その馬鹿らしい物が実に美しいのである。アトリエの片隅に並べられた壺が私の目を楽ませてくれる。

じつと座っていると色々な民芸品が語りかけてくる。物と私の対話である。長い年月の中に人間の生活の汗と汚れがにじみ美しい物の姿として出来上がったのであるが実に素晴らしいことである。昔は生活必需品として一般民衆から愛され使用されてきた訳であるが、今は利用価値がないと捨てられて行くのである。何となさげないことであろうか。

でもらったのに免じて文句も言わずに聞き流しておいた。

一九六五年発行の International Calligraphy Journal, Book Reviews 欄に「肥後椿」の本が、かなり詳しく紹介されてから、英国にある、国際椿協会関係者からくる手紙の宛名に「ドクター」がつくようになった。

英国などでは本の一つも書く者なら、みんなドクターなんだろうから先方が早合点したのだろう。博士号なんか、どこからか貰うものにきまっている。どうせ向こうで勝手にドクターにしたんだから、もらっておくと、今でもそのままにしている。手紙の宛名に「様」がつくことが「殿」がところが格別文句をつけることは無い位に考えまわしてね。

先般皇太子ご夫妻が熊本へお出になったとき、熊本駅ホームでご送迎申し上げたのが、ホームに降り立られた美智子妃殿下の胸の肥後椿が印象的だった。

あとで、寺本知事に、東京へお立ちの前にわざわざ赤と白の肥後椿をご準備になり、熊本県内におはいらになると、すぐにそれをおつけになったものだとお聞きして、一層うれしく、ありがたく思っています。

肥後椿、春の展示会で苗を買う人が年毎に多くなっているが、七十を越した位の年配の方が二、三十センチの小さな苗

私のアトリエには毎年いくつとなくいろいろな壺や瓶が集められていく事である。

(画家・東光会々員)

押したり

立てたり

赤池 元則

図書館につとめていながら、なかなか本が読めない。ひまはあるのだから、忙しくて読めないというのはどうも嘘らしい。いつも何か追っかけてられているような心の安定がないためであろうか。なんとなく疲れて夕飯がすむとゴロリと横になりながら、見るともなくテレビを眺めて一日が終わることが多い。追っかける気持ちにきりかえるとまた違った姿になるのだろうか。そこが年のせいというものであろう。

それに六十七歳の首相などまた総裁選に出馬して、山積する問題を追っかけようとするのだから、偉いもんだとしみじみ感心する。更に感心するのは、せいぜい後二年ぐらいたらうのによくもあんなファイトで仕事ができるもんだということである。家内などから、もうあなた

を如何にも楽しそうに選んでいるのが目につく。

「あの人は、いくつまで生きる積りで、あんな小さな苗を買っていくのだから」

と思うと同時に「椿の木のようになが生きして下さい」と願わずにはいられない。椿苗が力強いのび育ち、一年でも早く、美しい花をその老人にみせてくれることを祈ってやまない。

この間、東京のある集会の席で、私が熊本のものだとわかると、肥後椿の話をはじめた人があった。

「熊本のお宅には肥後椿をおもちですか」

「はあ、庭に少しばかり」

「何本位」

「二、三十本はありましよう」

「ほう、熊本では、どこでもその位もって、おりますか……」

まだまだ問答はつづいたが、熊本のどこの庭にも肥後椿が何十本もあるなら熊本は椿の森になるだろう。そして熊本市がそんな椿の町になったら、どんなに美しい町になるだろう、日本に一つ位そんな町があってもいいはずだ。平均樹令千年といわれる肥後椿のことだ、何はともあれ植えておくこと。一本でも多く。

(熊本振興KK社長・肥後椿協会会長)

も年なんだからお酒もほとんどになざらんとど注意されると、それもそうだとエネルギーギッシュに行動するのは年齢にふさわしくないように思ってしまうのである。

然し年の功も時にはあるもので、父の位牌に参りながら、人間は横のつながりばかりで生きていくのでなく、縦のつながりでも生きていくという自覚を持つことができるようになった。一国の民主主義の社会も、横の社会性と縦の歴史性がクロスする時点でないとも本ものも育たないような気がするのである。

二十世紀は日本の世紀になるだろうと、アメリカのコンピュータは答えている。そうであるが、人間のあさましい対決の世界に行きつづまりを生じる時、日本がそのリーダーシップをとらねばならないとするならば、日本のどういふ姿が信頼され力となるのであろうと心配になってくる。

昭和元禄、新戦国時代とかいわれているが、古来祖先がいろんな外来のものを吸収消化するに当って、いくらかの波らんや衝突はあったにせよ、あらゆる混血の中に日本の統一の力が、めいめいのうちに一貫していることを誇りに思い自負したのである。

私はこの頃おもしろい発見をした。わ

私と民芸品

坂田 憲雄

今から五、六年前のことである。

ある日曜日に三角方面に写生にいったことがあった。その日は晴れた春日和で、春特有な霞がかかり何とも言えない気持ちの良い一日であった。十号の絵を二枚ほど描いて帰る途中、海岸通りを裏に通り返ると古ぼけた小屋があり、隅の方に褐色の口のほそい面白そうな壺が投げすててあるのが目についた。

その日はそのまま帰ったが、それから半年ぐら以後のこと、またその小屋のよこを偶然通りかかると前とおなじ様にその壺が投げすてたままになっている。近よって見るとなるほどそれは美しい壺である。壺というより瓶(かめ)と言った方が適当であろう。一寸見て明治の初期か中期ぐらいの物らしい、まあ百年近くはたっていると思えた色、形、実に美しいのである。家の持ち主にきいてみるとそれは不要だから捨てたと言う、私は許しをえて持ち帰ったわけであるが、それが私の民芸品収集の初めであった。

それからあちこちの友達から不要品のかりきったことにちがいがいが、根のない椿のぼくに接木をする時、台木に根が出てから接木するより、新しい芽を先に接木して土にいけこんだが発根が早くて旺盛だということである。教育の秘訣も政治の要諦もなんだかそれに似通っているように思えてならない。

へりくつかもしれないが、私はかねがね『教育というものは教えと育ての二つの作用で成立するものであり、教えとは押し得させること、育てとは素を立てることであると思っている。得させるところまで押しやらないでは教えにならないのに、中途半端の押しっぱなしで教えたと錯覚する場合がある。素を立てて自立させるところを過保護になったり干渉的に押したくったりして育てが成立しないでいる場合もある。更に問題は押すべきところと立てるべきところの混乱である。』教えるべきところを押し、育てるべきところを立てる、そういう力が親や教師の権威であろうと思っている。

明治百年は終わった。百年という台木に百年と新しい芽を接いで立派な椿に育てていかなければならないが、与えられた自分の立場で、どこを押しどこを立てていくかじっくり考えて仕事を追っかけていきたいと念願している。

(熊本県立図書館長)